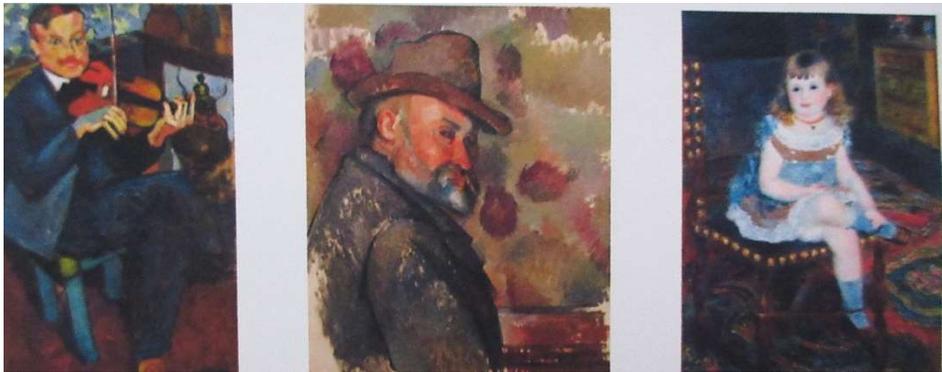


「ひとを描く」展

アーティゾン美術館（京橋） 24. 11. 02～25. 02. 09

古代ローマの大ブリニウスの『博物誌』には、コリントの陶器商の娘が旅立つ恋人の姿を残しておくために、壁に影をかたどったというギリシャ人の説話がかかれていいる。この物語は、18世紀後半から19世紀初めには、絵画の起源として引き合いに出された。そして、ヨーロッパの歴史を見てみると、「ひとを描く」ことは作品制作の重要な要素のひとつであったとされている。

本展は、当館のコレクションから、「古代ギリシャ陶器」と「近代ヨーロッパの絵画作品」など「約85点」で、人物表現の豊かさを紹介している。



アンドレ・ドラン 《ヴァイオリンを弾くヴラマンクの肖像》 1905年
このヴラマンクをモデルに描いた作品は、右下にドランのサイン、左下には「ドランによる私の肖像」との書き込みがあり、モデルは誰か、どのような物語を描いているのか？など制作背景から、人物画の名作として楽しめる。

ポール・セザンヌ 《帽子をかぶった自画像》 1890～94年

素早い薄い塗りと柔らかな色班で、自画像を左端に寄せ肩から腕の線を強調する簡潔な構図で、謙虚ではあるが自身に満ちた円熟期の自己の姿である。

P・Oルノアール 《すわるジョルジェット・シャルパンティエ嬢》 1876年
メイプルウッドの陶器 《アプリア赤像式鐘形クラテル「男女図」》



藤島武二・長谷川路可 《アルドブランディーニ家の婚礼図（摸写）》